

現代フランス語における間接補語 代名詞の用法について

—所有与格再考—

松 田 孝 江

I 序

本稿は、「現代フランス語における所有与格について」と題する論文（「大妻女子大学文学部紀要」1977年第9号）で述べた考えを再検討するものである。前稿発表後、諸先生方からいろいろご教示いただき、それがこの問題をふたたびとりあげるきっかけとなった。拙い小論を批評して下さったことに感謝するとともに、これからも忌憚のないご教示、ご叱正をいただければ幸いである。

II 所有与格は存在するか

前稿では、大方の文法書、手引書の類が認めている、体の部分を表わす名詞と間接補語人称代名詞の関係を、主として Brunot がその著 *La Pensée et la Langue* で述べている説に依拠して論じたものであった。「所有与格」とは、Brunot のいう *complément d'appartenance* を援用したものである¹⁾。Je lui prends le bras. と言うとき、確かに lui と le bras が所有者・被所有物の関係にあることは否めない。そしてこのような説明が、単純明快で便利なことも確かである。しかしこれは、あくまで意味の深層において生ずる関連であって、これをもって統辞関係を説明しようとしたのは適切ではなかった。言いかえれば、間接補語は、統辞上、あくまで動詞の補語であり、名詞の補語にはなりえないのである。ところで、この問題を考えるきっかけとなったのは、「誰かが私の腕をつかむ。」という表現にたいし、フランス語では *On me prend le bras.* と *On prend mon bras.* との二通りの表現が可能であるが、その違いは一体どこにあるのか、という素朴な疑問であった。だがこれを理解するには、どうやら言葉の表面の統辞論にとどまっているだけでは不十分で、その背景をなす考え方、思考方法をも考慮することが必要なようだ。そこで本稿では、この種の構文のもつ問題点を、意味の分野をもふまえ、再検討したい。

III 定冠詞と所有形容詞

ここで、問題の核心からはそれるかもしれないが、体の部分の名詞につけられる所有形容詞の使われ方をみてみよう。Grevisse の手引書によれば、「その体の部分が誰のものか、所有者が一見して明らかかな時は定冠詞を、そうでない時は所有形容詞を用いる。」¹⁾ となっているが、所有形容詞は、その名称ゆえであろうか、「所有」を離れた側面が詳しく論じられることは少ない。定冠詞との関連において一般に認められていることといえば、次の例にみられるように、名詞が付加形容詞を伴うと、かならず所有形容詞がつくことぐらいであろうか。tendre l'oreille も hausser les épaules も、普通は定冠詞がつく。²⁾

(1) Il tendit sa meilleure oreille. — *Les Thibault*, II, 259.

彼は全神経を傾けて耳を澄ました。

(2) Ce ne sont pas des gueux comme lui qui nous font peur ! interrompit l'hôtesse, en haussant ses grosses épaules. — *Madame Bovary*, 97.

「私たちが恐れているのはあんな貧乏人じゃないのよ。」と女主人は大きな肩をすくめながら言った。

付加形容詞と所有形容詞の結びつきは、事実として認められているものの、その事実をどのように解釈するか、ということについては、あまり言及されない。こうしたなかで、A. G. Hatcher は、所有形容詞を定冠詞に対立するものとみなし、非常に実証的な研究を残している。³⁾ Hatcher はまず、対象となる体の部分の名詞を、所有者が一見して明らかなものに限定する。そして現実には、その枠内でも、ある時は定冠詞が、またある時は所有形容詞がでることに注目し、両者の違いの底に横たわるものを見極めようとする。Hatcher のとった方法は、次のような例の比較検討であった。

{	Il fumait <i>en avançant les lèvres</i> , crachant à toute minute, se reculant à chaque bouffée.	MB 7
	Et elle répétait, <i>en avançant ses lèvres</i> comme pour un baiser . . .	MB 142
{	Emma, le menton contre sa poitrine, <i>ouvrait démesurément les paupières</i> ; et ses pauvres mains traînaient . . .	MB 446
	Ses yeux lui paraissaient agrandis, surtout quand elle <i>ouvrait</i> plusieurs fois de suite <i>ses paupières</i> en s'éveillant; noirs à l'ombre et bleu foncé au grand jour . . .	MB 45

様々な例を比較した結果、Hatcher は定冠詞と所有形容詞とを弁別する要因として、異なる二つのケースを明らかにしている。

(1) 古くからある固定した表現には、定冠詞をとることが決まっていて、作家や話し手の自由にならない表現がある。例えば、lever les yeux, tourner la tête, froncer les sourcils, ouvrir les yeux など。しかし同じ動作でも、vocabulaires を入れかえれば、所有形容詞がでる。こうして、relever ses yeux, dresser ses sourcils においては、定冠詞は不可能であり、tourner son visage でも普通は所有形容詞であるが、ouvrir [les, ses] paupières ではどちらも可能となる。こうした場合、vocabulaires の変更をもまきこんだ限定詞の交換の意図するところは、それによって使い古された表現の殻を破り、新鮮で vivant な文体効果を出すことにある、と Hatcher は説く。

(2) (1) においては、定冠詞に代わる所有形容詞は、書き手が “graphic emphasis” をねらったために生ずるのであって、意味の違いはなかった。しかしまったく同じ表現内でおきる交換、先の avancer les lèvres と avancer ses lèvres, ouvrir les paupières と ouvrir ses paupières では、意味上ニュアンスが違いと Hatcher は説く。そして定冠詞には typical; abstract; self determined, pure mouvement; natural; static という性格を、所有形容詞には original; concrete; activity directed toward a terminus; constrained mouvement; dynamic といった、定冠詞に対立する性質を与える。⁴⁾

われわれはここで、体の部分を示す名詞の特性に注目したい。われわれの認識の対象となる世界

で、われわれ自身の体は特殊な位置を占めている。認識の主体であると同時に、物として、認識の対象となる二重性を備えている。体の部分が、主体としてのはたらき、例えば精神作用や感覚作用に与る時は、その部分は、対象というより、主体に組みこまれた、主体そのものとなる。ところが一方では、自らの体に異常を認めたようなとき、われわれは、常ならぬその部分をじっと観察し、対象として捉えるであろう。十八世紀の文法家、Du Marsais によれば、本や時計は、「われわれの考え方とは独立して存在する真実の対象の名称」であるのにたいし、*idée* や *concept* は「真実の対象」、いわんや「知覚されるもの」を代表するとは言いがたいという。⁵⁾ われわれ自身の肉体も、真実の対象になりきれない点で、これに近い。定冠詞か所有形容詞かの違いは、体の部分が、主体の側にとどまるか、対象として捉えられるかの違いではなからうか。一般に、体の部分が主体の側にあれば定冠詞が、主体を離れた対象としてみなされる時は所有形容詞がでてくるといえよう。Hatcher が定冠詞および所有形容詞の特長として先にあげた対照的な性質も、これを如実に物語っている。

所有形容詞か定冠詞かの選択が、所有関係云々とは別の基準による、と説いた文法家に、もうひとり G. Guillaume がいる。baiss^{er} la tête, relever la tête, hausser les épaules などは、心の動きを表わす *expressif* なしぐさであり、表現が心理的・精神的要素を帯びているときは定冠詞を使う、と説く。⁶⁾ この心理的・精神的要素を帯びている動作は、体の部分が主体そのものの働きに与っているわけで、定冠詞が用いられるのは上記とまったく同じ原則による。Guillaume の「冠詞論」は 1919 年に出され、Hatcher の論文は 1944 年のものである。Guillaume は一般的な原則を説き、Hatcher は、豊富な資料を横縦に駆使して、実際の現われ方を細かく分析している。

IV 関与のしかた；全体と部分

身体部分が持つ認識上の二重性については先に述べた。この身体を持つ二重性—主体そのものであると同時に客体にもなりうる—は、外界からある人物に対して働きかける場合にも、その接近方法に少なからぬ影響を与える。例えば、日本語の「太郎の腕をつかむ」という表現にたいして、(1) *Je prends Paul par le bras.* と (2) *Je prends le bras de Paul.* との二通りの表現が可能である。ポールの腕は、本人がとり外しておいてある義手ででもないかぎり、ポールその人でもあるのだ。(1) では全体から部分に、つまり Paul という主体を通してその一部が把握されるのにたいし、(2) では直接腕に到達する。フランス語以外のことばでは

{ I take Mary by the arm.
 { I take the arm of Mary.
 { Ich nehme Franz mit dem Arm.
 { Ich nehme den Arm von Franz.

英語でもドイツ語でも、フランス語に対応する二通りの表現が可能であることは、このような捉え方が決してフランス語独自のものでないことを示している。更に遡れば、ホメロスの詩篇には、「彼を、頭を、刀で打った。」とか、「彼を、肝臓を、食いちぎった」のごとくに、一つが全体、一つがその部分の限定を示す二重対格がみられるという。¹⁾ こうしてみると、「自分の手や足」は、自分のハンカチや本と違って「私自身」でもあること、「彼の手や足」も、彼のハンカチや本と違い、「彼自身」でもあることから、印欧語では、ヒトに関して、主体との関連において部分を捉える表現方法が昔から根づいていたものと思われる。²⁾

V 間接補語代名詞構文とその意味領域

間接補語代名詞構文（以下略して IO 構文とする）とその意味領域を考察するに当たって問題になることは、所有形容詞構文との関係であろう。構文上明らかなのは次の二点である。¹⁾

1. 被所有名詞が付加辞を伴うときは、所有形容詞構文に限られる。これは III でみたのと同様、部分が部分として対象化されるためであろう。

2. 被所有名詞が文の主語を占めるときは、成句として確立している構文を除けば、所有形容詞構文が優勢である。前稿で¹⁾、*lui faire mal* という表現について、サルトルが間接補語代名詞と所有形容詞を併用していることを記したが、*lui faire mal* にみられるこの傾向は、その後の調査で、サルトルに限らず一般に散見することがわかった。

Ses pieds lui faisaient mal. — Les Thibault, I, 73.

Sa nuque lui faisait mal. — Ibid., 380.

Ses paupières lui faisaient mal. — Les jeunes filles, 87.

lui faire mal という構文だけにみられるこの傾向は、IO 構文から所有形容詞構文へ移行する過程で生じた混淆現象といえようか。

所有形容詞は、「所有」を離れたところで、意味上、定冠詞のヴァリエーションとして働く、という Guillaume と Hatcher の説を先に検討した。この二人の文法家は、IO 構文についても、表面的な機械論にとどまらない解釈をしている。Guillaume は IO 構文について、「間接補語代名詞が所有機能をわが身にひきうけ、それによって、名詞に、定冠詞をとる自由を確保してやるのだ」、「IO 構文はそれを可能にするための《biais》である」と説く。²⁾ したがって、所有者が自明なときに、定冠詞と所有形容詞とを弁別した要素——Guillaume が *l'existence du caractère moral du geste* と呼ぶ心理的・精神的要素——が、IO 構文と所有形容詞構文にもそのままひきつがれているとみなし、次のように結んでいる。³⁾

Encore ne faut-il pas perdre de vue que le maintien de l'article est subordonné à l'existence du caractère moral du geste. Au cas où ce caractère disparaîtrait, on reviendrait à l'expression possessive directe, non dérivée sur un pronom. Ex.: Le médecin prit sa main (la main du malade). S'il se fût agi d'un geste inspiré par un mouvement moral, on eût dit: lui prendre la main. Au surplus, la nuance est délicate, et n'est pas toujours observée dans la langue usuelle.

ところで、Guillaume のいう精神的・内面的要素も、言語の現実には照らしてみると、必ずしも IO 構文のすべてに当てはまるものでないことは、上の最後の一文を待つまでもない。われわれの知っている IO 構文は、精神的要素だけをもってその特長とするには、余りにも複雑多岐にわたっているのである。その点 Hatcher は、IO 構文の特長を次にみられるようにより細かく分析した。⁴⁾

- 1) 身体感覚器官に対して、外部からの継起する刺激を表わす。
- 2) 利益・損失の概念を表わす。
- 3) 身体の痛痒を表わす。
- 4) 社会的・情緒的働きかけを表わす。

5) 上記 1)~4) とは違い、純粋に叙述のテクニックから、人物を全体像として示す目的をもったもの。例: *Son chapeau lui couvrait le visage.*

Hatcher の研究は、IO 構文の諸相を、他の誰よりも細かく分類してみせてくれたところに意義がある。ただ、Guillaume にしても Hatcher にしても、感覚・情緒にこだわりすぎた嫌いがある。Guillaume の「精神」だけでは物足りなく、Hatcher が、1)~4) とは全然性質の違う 5) を加えざるを得なかったのは、IO 構文の本質が、感覚・情緒とは違った次元にあることを示しているのではなからうか。

間接補語は、動作の向かう対象を示すことによって、動詞の意味を補う。したがって、IO 構文は、動作が人に関与する、動作が人物全体を通してその人の体の部分に達するところに成立する。ゆえに、動作が人に関与しないかぎり、ある人の個人としての領域になんらかの影響を及ぼさないかぎり、IO 構文は成立しない。**Je lui admire la tête.* とはいわず、*J'admire sa tête.* という。**Il me marchait au côté.* とはいわず、*Il marchait à mon côté.* と言う。⁵⁾ これは、それぞれの文の主語になっている人物が、物理的であれ心理的であれ、「彼」なり「私」なりに直接働きかけたり、影響を与えることがないからである。IO 構文を意味の上から分類するとしたら、われわれは、人と人との、あるいは物と人との関わり方によって分けるであろう。以下、IO 構文を二つに大別し、事例をみてみよう⁶⁾。

A. 自己の内部に生ずる生理的・心理的現象を表わすもの。その要因となるものは、精神的なものや肉体的なものに大別されるが、精神的な要因が生理現象となってあらわれることもある。

- (1) *Les larmes lui en venaient aux yeux.* — *Jean-Christophe*, I, 136.
涙が彼の眼にあふれ出た。
- (2) *Jacques ne s'y attendait pas: un peu de rougeur lui vint aux joues.* — *Les Thibault*, I, 140.
ジャックはそんなこと考えてもみなかった。彼はほんのり頬を赤く染めた。
- (3) *Un frisson lui court le long de l'échine.* — *Jean-Christophe*, I, 30.
彼の背筋に戦慄が走った。
- (4) *Elle sentit le sang lui refluer au coeur.* — *Ibid.*, I, 295.
彼は心臓に血がのぼるような気がした。
- (5) *A mesure qu'il lisait, une sueur froide lui montait au visage.* — *Ibid.*, 468.
読み進むにしたがって、彼の顔に冷や汗が浮んできた。
- (6) *Ah ! pourquoi la tête lui faisait-elle si mal ?* — *Jean-Christophe*, II, 347.
ああ、どうして彼女の頭はこんなに痛むのだろうか。
- (7) *Un souvenir lui traversa l'esprit.* — *Jean-christophe*, I, 295.
ある思い出が彼の心をよぎった。
- (8) *Mais ce qui n'aurait jamais pu lui venir à l'idée, c'est qu'elle jouât Hamlet.* — *Ibid.*, 432.
しかし、彼の思いもよらなかったこと、それはハムレットを演るということだった。

B. 外界との物理的または心理的交渉を表わすもの。外界との交渉のありようは、接点を保ったままの状態を表わすものから、接近・離脱によって、なんらかの動き・働きかけを示すものまで広範囲にわたる。すでにみたように、こうした結びつきがなければ、IO 構文は成立しない。また、

ある種のしぐさが、ある決った精神的内容を伴うことも多い。

- (1) La fumée du tabac *lui* entrainait dans les yeux et la gorge. — *Jean-Christophe*, I, 72.
たばこの煙が、彼の眼や喉にしみた。
- (2) Malgré le vent glacial qui *lui* cingle la figure, *lui* emplit les narines, la bouche, *lui* donne la sensation qu'il se noie, il ne sent pas qu'il avance. — *Les Thibault*, V, 66.
冷たい風が顔に吹きつけ、鼻孔や口に侵入し、水に溺れていく時のような気分させたが、彼には、自分が前進しているとは思われなかった。
- (3) A chaque fausse note, il en frappait les doigts de l'enfant, en même temps qu'il *lui* vociférait à l'oreille, à le rendre sourd. — *Jean-Christophe*, I, 75.
キイを間違えるたびに、彼は子供の指をたたき、彼の耳元で、つんぼになるほどになった。
- (4) Ainsi, l'enfant restait, oublié, oubliant, dans le coin du piano, — jusqu'à ce que brusquement il sentit des fourmis *lui* monter dans les jambes. — *Ibid.*, 74.
こうして子供は、忘れられ、われをも忘れてピアノの隅にじっとしていたが、急に足がしびれた。
- (5) Il *lui* secouait le bras, à le briser. — *Ibid.*, 76.
彼は、つぶれてしまうほど激しくその腕を振った。
- (6) «Je voulais seulement vous avoir serré la main aujourd'hui.» — *Les Thibault*, II 327.
「今日は、ただあなたと握手したかっただけなのです。」
- (7) «Finis-en, une bonne fois, flanque-*lui* un coup de pied au ventre !» — *Jean-Christophe*, II, 418.
「もうこれで最後だ。あいつの腹を足でけとばしてやれ。」
- (8) «Mettez-*lui* la tête bien droite, voulez-vous ?» — *Jean-Christophe*, I, 344.
「彼女の頭をまっすぐにしてやって下さいませんか。」
- (9) Le nouveau venu, d'un mouvement de tête, laissa tomber sur ses épaules les capuchon qui *lui* cachait les yeux. — *Les Thibault*, II, 214.
新参者は、頭をふって、眼の上までかぶさっていた頭布を肩の上に落した。
- (10) Mais, aussitôt, Rachel fut contre lui: ce parfum d'ambre qui *lui* restait aux doigts pour avoir, cette nuit, manié le collier de Rachel. — *Les Thibault*, I, 528.
しかし、たちまちラシエルの姿が彼の面前に浮んだ。その晩、ラシエルの首かざりに触ったために、彼の指には龍涎香の匂いが残っていたのだ。
- (11) Le Her Konzertmeister, grand vieux homme voûté, avec une barbe blanche qui *lui* pendait comme une queue au menton, et un long nez recourbé, muni de lunettes, avait l'air d'un philologue. — *Jean-Christophe*, I, 365-366.
コンサートマスターは腰の曲った老紳士で、尻尾のように垂れ下った白い顎髭、大きなしっ鼻に眼鏡をかけ、文献学者のような風采をしていた。
- (12) Christophe *lui* avait arraché le papier des mains. — *Ibid.*, 140.
クリストフは、彼の手から紙を奪い取った。
- (13) La vieille religieuse, à demi renversée par les secousses, perdit l'équilibre: l'autre

mollet *lui* glissa des mains. — *Les Thibault*, II, 309.

老修道女は、ゆすぶられて半ばのけぞり、バランスを失った。もう一方の脚が彼女の手から滑り落ちた。

(14) Et la phrase qu'elle se répétait sans cesse *lui* jaillit enfin des lèvres. — *Les Thibault*, IV, 348.

そしてとうとう、彼女がいつも自分に言いきかせている言葉が、その唇からほとぼしり出た。

(15) Il *lui* prit la mallette des mains, et la suivit dehors. — *Ibid.*, 357.

彼は、彼女の手からトランクをとり、彼女の後について外へ出た。

例文 (1)～(6) は、対象への接近を示す。(7), (8) から、IO 構文は、命令文でもごく普通にみられることがわかる。(9)～(11) は、状態を示す。(12)～(15) は離脱を示すもので、前置詞 *de* が共通してみられる。ある人に係わりをもつその係わり方は、接近であれ状態であれ離脱であれ、身体的接触を伴うことが多いが、たとえ身体的接触を伴わなくとも、その人の個人としての領域に影響があると認められれば、IO 構文をとる。次の例をみてみよう。

(1) Rosa *lui* agitait triomphalement sa tapisserie sous le nez. — *Jean-Christophe*, I, 276.

ローザは、勝ち誇ったように、刺繍した布を彼の面前でひらひらさせてみせた。

(2) Corinne *lui* riz au nez. — *Ibid.*, 440.

コリーヌは、彼を面と向って嘲笑した。

(3) La société *me* roule sur la tête. Au lieu du ciel... forcément... Je la vois marcher, cette société. — *Hiroshima mon amour*, 87.

世間がわたしの頭の上を回りながら通っていく。空のかわりに……いやおうなしに……私には人々が歩いていくのが見える、世間の人々が。

(1), (2) の *agiter* や *rire* は、直接相手との接点はないが、心理的には相手の存在を意識してのことである。(3) は、地下室に隠れ住んでいる女性が、地下室の小さな窓から、外を通る人々の足の動きだけを見ながらのモノログである。外の人々と「わたし」との間には、地下室の天井や壁という隔りがある。にもかかわらず、人々は壁や天井ごしに「わたし」の内部に影響を及ぼさずにはいないのだ。頭上には空が拡がっていることが普通なのに、この女性は、人々に踏みつけにされているような気分、地下室の窓ごしに人の足を見て暮す屈辱を味わっているのである。

ところで、Guillaume によれば、*prendre sa main* と *lui prendre la main* の違いは、動作が心理的様相を帯びているかいないかの違いであった。⁷⁾ しかし Hatcher によれば、これはそう単純明快に断言できることではない。確かに *lui prendre la main* は *prendre sa main* よりも *émotionnel* な表現であった。しかし前者が次第にパターン化した結果、*émotionnel* な効果を期待する時には、作家によっては、むしろ *prendre sa main* の方を採る結果になっている、という。⁸⁾ このようなまったく相反する解釈を前にして、二つの表現の微細な違いについて云々することはためらわれる。Guillaume の原則は原則として、言葉の現実はそのすっきりわりきれるものではない、ということだろうか。この *émotionnel* な要素も、上記のすべての用例にあてはまるわけではない。とりわけ、状態を示す B の (9)～(11) については、こうしたニュアンスを認めることはできない。

また、A, B の用例中、A-(8) の *lui venir à* という成句を除き、それぞれに対応する所有形容詞構文を想定することができる。したがって IO 構文と所有形容詞構文は、互に他を排除する対立関係にあるというより、体の部分を捉える際の発想の違い——部分から全体への道を進む考え方と、直接部分を対象として捉える考え方——の表われであり、共存しているといえる。

意味領域について、二点ほどつけ加えてこの項をしめくりたい。

フランス語では、個人の領域は体から切り離せないもの、体の部分や、*mémoire, pensée, idée* などの思考を表わす抽象名詞が一般的であるが、次の例にみられるように、身につけているものにまで及ぶことも稀にある。

Don Mateo lui saisit les deux manches de son veston, . . . — La femme et le Pantin, 43.

ドン・マテオは、彼の上着の両腕をつかんだ。

Il contempla Jenny sur sa robe de toile blue lin, et lui mit au corsage une rose blanche. — Les Thibault, I, 421–422.

彼はジェニーに向かって、彼女のブルーがかかった亜麻色のニットのドレスをほめ、その胸に白いバラをつけてやった。

ここにみられる *manches* や *corsage* は、いずれも持主が身につけているのであって、いわば体の部分の延長といえよう。

また、所有者と被所有物である身体の部分には、ヒトについての表現が普通であるが、時に動物に対しても、ヒトに準じた扱いをすることがある。

On entendait, dans la basse-cour, crier les vorailles que la servante poursuivait pour leur couper le cou. — Madame Bovary, 96.

庭では、女中が首をはねようと追いかけている鳥たちの叫び声がしていた。

VI IO 構文に対応する名詞構文は存在するか。

Je prends Paul par le bras. は、*Je le prends par le bras.* にみられるごとく、目的語を代名詞で置きかえることができる。代名詞 *le* は、*Paul* の代理辞である。それでは、IO 構文には、対応する名詞構文があるだろうか。

Bally は、*Linguistique générale et Linguistique française* で述べている。¹⁾

「利害関係のある人物をしめす格は、アトン代名詞の形をとってのみ存在し、したがってとうぜん動詞に先立つ：《*Je vous retiendrai une place*》「あなたに席をとっておいて上げましょう」、《*Je lui ai obtenu un emploi*》「あの人に口をみつめてあげた。」；これに相当する実体詞はおなじ構造をもたない；ひとは《*Je retiendrai une place à Paul*》とはいわず、むしろ *pour Paul* という。また、次の文の間にも不一致がある：《*On lui passe devant, on lui marche dessus*》「かれの前をすぎる、かれの上をふんでゆく」と《*On passe devant un inférieur, on marche sur un ennemi*》「目したのものの前をすぎる、敵の上をふんでゆく」…

われわれは、間接補語を機能の面から代理辞と非代理辞の二つに分けることができる。代理辞は対応する被代理辞を持ち、それは一般に前置詞 *à* + 名詞である。前置詞 *à* は、*donner à quelqu'un* と *prendre quelque chose à quelqu'un* にみられるように、賦与と奪取の相反する意味で使われるが、ともかく形態は同じである。他方、次にあげるような構文は、被代理辞を持たない。

- (1) *Je vous retiendrai une place.*
私はあなたのために席をひとつとっておきましょう。
- (2) *Les oreilles du pharmacien lui tintèrent à croire qu'il allait tomber d'un coup de sang. — Madame Bovary, III.*
薬屋の耳は、惱溢血でいまにも倒れるのではないかと思うくらい、がんがん鳴っていた。
- (3) *Regardez-moi cette misère. — A. Thérive, Sans âme, 31.*
この惨状を見て下さいよ。²⁾
- (4) *Je te vous le prends. — Colette, Le voyage égoïste, 158.*
私はそれにしますわ。²⁾

(1) の vous は、文中で占める機能も意味もはっきりしている。この vous がなければ、全体の意味が完成しない。これは一般に、利害の与格 (datif d'intérêt) と呼ばれるものである。それにたいし、(3) の moi は、心性的与格 (datif éthique) と呼ばれる。論理的にはこの moi がなくても文として成立する。「相手がその惨状を見てくれること」に対して、moi なる人物が関心を示している。moi を「私のために」とする必要はないにしても、ある人の、ある事象に対する関心を示している点で、一般に心性的与格は、利害の与格の延長線上にあるとされる。そしてそれは、(4) のように時として文法規範をも超越してしまう。(2) にみられる lui も、文法的には、これがなくともさしつかえない。文のリズム上加えられたものか、あるいは一種の強調として使われているのか定かではないが、この lui も代理辞でないことは確かである。われわれは、相当する名詞構文を持たない間接補語代名詞の、ひとつの系統として、利害の与格から心性的与格に至る線上にあるもの、上記例文の (1)～(4) にあたる系統を考えることができる。それでは、IO 構文における間接補語には、相当する被代理辞が存在するだろうか。Bally は 1926 年に発表した論文で既に述べている。³⁾

「Je lui casse la jambe にたいして、Je casse la jambe à Paul」と言うのはためらわれる。これは、《la jambe à Paul》の部分か、《la jambe de Paul》のように解釈されるからであろう。どうしてそうなるのか。まず言えることは、ロマンス語の語順では、後続する語がその前の語を限定する (construction progressive) 傾向にあることだ。ここではさらに、実体詞 substantif が関与の与格 datif de participation を排斥することも、この傾向を一層強めることになる。ちなみにドイツ語では、曲用が残っているので、フランス語ほど前進的辞列 construction progressive に縛られず、この種の datif を名詞にまで広げることも可能で、datif 構文を豊かなものにしていく。《den Mädchen nachlaufen 娘たちを追いかける》、《dem Feinde das Herz durchbohren 敵の心臓を貫く》、etc.]

近年、変形文法の立場から、間接補語代名詞のメカニズムを解明しようとする研究が盛んである。身体部分を扱う IO 構文についても、文の変形をとおしてさまざまな考察がなされているが、そのひとつの焦点は、Bally 以来の、IO 構文は相当する名詞構文をもつか、という問題である。次の用例中、(1)～(4) は Boons からの、(5)～(7) は Kayne からのものである。⁴⁾

- (1) *La tête lui tourne.*
(2) *La tête de Paul tourne.*
(3) *La tête lui tourne, à Paul.*
(4) *La tête tourne à Paul.*
(5) *On lui a tiré dans le ventre.*
(6) **On a tiré dans le ventre à ce garçon.*

(7) On a tiré dans le ventre de ce garçon.

(3) は、*tourne* で一担切って、*à Paul* をつけ加えた文である。ここでは (1) と (4) の関係が問題となってくるが、Boons は (4) の構文そのものについて、“*cette dernière phrase, familière, restant au moins acceptable*” と、肯定はしているものの消極的である。主語名詞が被所有名詞である構文は、もともと限られているゆえ、(1) (4) の関係はひとまず措くとしよう。(6) のような自動詞の構文では、名詞構文が成立しないことははっきりしている。他動詞ではどうか。次にあげる用例は、Kayne からのものである。⁵⁾

- (1) Paul lui a embrassé le front.
- (2) ?Paul a embrassé le front à Marie-Claire.
- (3) Paul a embrassé le front de Marie-Claire.
- (4) La poussière lui a noirci les jambes.
- (5) ?La poussière a noirci les jambes à ce garçon.
- (6) La poussière a noirci les jambes de ce garçon.
- (7) On lui a cassé le bras.
- (8) On a cassé le bras à ce garçon.
- (9) On a cassé le bras de ce garçon.

(2) と (5) は疑問視されている。疑問符は、「聞き手としてはその意味を理解できる。しかしみずから口にすることはない。」とでも解釈できようか。ところで統辞上は (2), (5) と同種の文でありながら、(8) は容認されているが、これには問題はないだろうか。(7)～(9) について、Kayne は次のような説明を加えている。

Il n’y a pas ici de différence tranchée quoique (8) soit peut-être légèrement moins naturel que les autres. Il y a cependant plus qu’une simple différence superficielle entre (8) et (9). La première a la structure: V-NP-PP, la seconde la structure: V-[_{NP}Art-N-de-NP].

Kayne は、(8) を *légèrement moins naturel* と評している。そして、(8) の *le bras* と *à ce garçon* の間は、目的補語である *le bras* と、動詞の補語である *à ce garçon* の間に切れ目があるのにたいし、(9) の *le bras de ce garçon* は、ひとつつながりの *syntagme nominal* であるという。(8) は、Bally のあげた *Je casse la jambe à Paul* とまったく同じ構文である。Kayne の *légèrement moins naturel* である所以を Bally は具体的に説明していた。“*la jambe à Paul*” の部分が “*la jambe de Paul*” のように解釈されるため、*Je casse la jambe à Paul* と言うのはためられる、と。つまりフランス語では、*Je casse la jambe à Paul* を V-NP-PP と解することには無理があるようだ。しかし Kayne は、*légèrement moins naturel* とした俊巡を乗り越えて、次のように結論づけている。

La phrase (8) est ainsi du type exact auquel PL-CL (quand il déplace les datifs) s’applique – cf. *On a montré la photo à ce garçon* avec la structure: V-NP-PP.

Kayne の説に従えば、(8) における *à ce garçon* は、代名詞にかえて動詞の前に移動—これを Kayne は *placement de clitique*, 略して PL-CL と呼ぶ—できる。換言すれば、(7) の *lui* は、*à ce garçon* の代理辞であり、IO 構文 (7) に対応する名詞構文 (8) を肯定するものである。

Bally によれば、*Je casse la jambe à Paul.* はやや不自然な文であるが、同じ型の構文で、不自然でないものもあるかもしれない。次の例をみてみよう。

- (1) *Christophe parlait d'aller casser la tête à quelqu'un. — Mais à qui? — Jean-Christophe, I, 499.*

クリストフは、頭を砕いてやりたいと言った。—だが一体誰を？

- (2) *Il alla serrer la main à une dame qui passait, et grimaça des sourires. — Jean-Christophe, II, 112.*

彼は、通りすがりの婦人に握手を求めながら、作り笑いをした。

- (3) *Le peuple, de son côté, cassait la tête à quelques enfants du peuple — officiers et soldats. — Ibid., II, 200.*

人民はといえば、身内の者の頭を——将校であれ兵卒であれ誰かれ構わず——砕いていた。

(1)(2)(3) についていえることは、*casser la tête* なり *serrer la main* の動作の対象となる人物が、不定代名詞、もしくはそれに類する者として表わされていることである。特定の人物に向けられる行為は、大抵 *V-[NP Art-N-de-NP]* 構文で、*V-NP-PP* を集めると、不定代名詞に出合うのである。*On a cassé le bras à ce garçon.* についても、対象となる人物が特定できないような状況を想定してみたらどうだろう。誰かが腕を折られたことははっきりしている。しかしそれが、大勢の中の誰なのかははっきりしないとき、*A qui a-t-on cassé le bras?* という質問は、不自然ではあるまい。

以上のことから、われわれは次のように考える。不特定の人物対象については *V-NP-PP* が、特定の人物対象については *V-[NP Art-N-de-NP]* が使われる傾向があるならば、特定人物を前提とする *IO* 構文の間接補語代名詞をば、*V-NP-PP* 構文の代理辞と解釈することには無理がある。

ところで文法的には同じ構文でありながら、Kayne の用例中、(2) *Paul a embrassé le front à Marie-Claire.* と (5) *La poussière a noirci les jambes à ce garçon.* には疑問符がつき、(8) *On a cassé le bras à ce garçon.* が容認されているのはどうしてだろうか。次の例をみてみよう。

- Il serra la main à Maigret. — Maigret se trompe, 19.*

これは、*Il serra la main de Maigret* とすることもできるし、頻度としてはこの方が高い。しかしともかく、*serrer la main à quelqu'un* と *serrer la main de quelqu'un* は、対象が特定の人物であれ、ともに共存していることになる。だがこれは、*serrer la main* が「握手をする」という成句であるからこそ、*V-NP-PP* が容易に可能になるのであって、*V-NP-PP* の成立の度合いは、*V* と *NP* の結びつきの強さ、成熟度によって決まるのである。*Il serra la main à Maigret* から *Il lui serra la main* を導くことは易しい。だがこうした例は、自動詞をも含めた *IO* 構文全体の拡がりからいえば、ほんの一部であり、例外といっても過言ではない。

VII 結 語

フランス語、ひいては印欧語では、体の部分を捉えるにあたって、人物全体から部分へと向かう発想があることをみた。*IO* 構文はそのひとつの現われである。結果的には間接補語が体の部分の所有者となるが、統辞上は、これはあくまで動詞の補語である。

IO 構文と所有形容詞構文の違いは、結局定冠詞と、所有形容詞とよばれる限定詞との相関関係に行きつくとする Guillaume のような文法家もいる。

また、IO 構文に対応する実体詞構文は、Bally が言ったように、一部の例外を除き存在しない。換言すれば、IO 構文中の間接補語代名詞は、代理辞ではない。そしてそれは、同じく対応する実体詞構文を持たない利害の補語や、心性の補語に容易に転ずることができる。間接補語として、基本的な機能は同じはずであるから、この三つの補語は、その意味領域が重なり合う部分を持つといってもよい。IO 構文中の間接補語は、俗に「所有」を表わすと説明されているが、この呼称は非常に誤解を招きやすい。体の部分の名詞とともに使われる「関与の補語」は、あくまで動詞の補語として理解されなければならない。

注

II

- 1) F. Brunot, *La Pensée et la Langue*, Masson, p. 393.

III

- 1) M. Grevisse, *Le Bon Usage*, Duculot, p. 354.
- 2) Flaubert は次のように書いている。
Mais la maîtresse d'auberge ne l'écoutait plus: elle tendit son oreille à un roulement éloigné. — *Madame Bovary*, 101.
tendre l'oreille ではなく、tendre son oreille としたのは強調の意図からであろうか。
- 3) Anna Granville Hatcher, 《Il tend les mains vs. Il tend ses mains》, *Studies in Philology*, 1944, pp. 457-481.
- 4) Hatcher, *op. cit.*, p. 476.
- 5) N. チョムスキー, 『デカルト派言語学』, 川本茂雄訳, みすず書房, pp. 66-67.
- 6) G. Guillaume, *Le Problème de l'Article*, A.-G. Nizet, 1975, pp. 211-216.

IV

- 1) 高津春繁, 『ギリシャ語文法』, 岩波書店, p. 256.
泉井久之助, 『印欧語における数の現象』, 大修館, pp. 75-76.
- 2) ギリシャ・ラテンからの流れについては、Bally に次の論文がある。
《L'expression des idées de sphère personnelle et de solidarité dans les langues indo-européennes》, *Festschrift Louis Gauchat*, Aarau, 1926, pp. 68-78 に収録。

V

- 1) 拙論「現代フランス語における所有与格について」(大妻女子大学文学部紀要, 1977年第9号) 参照。
- 2) Guillaume, *op. cit.*, p. 214.
- 3) Guillaume, *op. cit.*, p. 215.
- 4) A.G. Hatcher, 《Il me prend le bras vs. Il prend mon bras》, *The Romantic Review*, 1944, pp. 156-164.
- 5) A.G. Hatcher, *The Romantic Review*, 1944, p. 162.
最初にこれについて言及したのは Hatcher であるが、最近では Kayne や Boons とも指摘している。
R.S. Kayne, *Syntaxe du français*, Seuil, p. 142. Boons, Guillet, Leclere, *La Structure des phrases simples en français*, Dorz, p. 182, 参照。
- 6) 代名動詞が体の部分の名詞とともに使われる構文については、代名動詞独自の問題も関係してくるので、ここでは除外する。
- 7) Guillaume, *op. cit.*, p. 215.
- 8) A.G. Hatcher, *The Romantic Review*, 1944, p. 161.

VI

- 1) シャルル・バイイ 『一般言語学とフランス言語学』, 小林英夫訳, 岩波書店, p. 254.
- 2) Grevisse, *op. cit.*, p. 418 による。
- 3) Bally, *Festschrift Louis Gauchat*, 1926, p. 73.
- 4) Boons. *op. cit.*, p. 181.
Kayne, *op. cit.*, p. 141.
- 5) Kayne, *op. cit.*, pp. 141-142, 156.

引用作品

- M. Duras, *Hiroshima Mon Amour*, Folio, Gallimard.
G. Flaubert, *Madame Bovary*, Le livre de poche.
P. Louÿs, *La femme et le Pantin*, Le livre de poche.
R. Martin du Gard, *Les Thibault*, I, II, IV, V. Folio, Gallimard.
H. de Montherlant, *Les jeunes filles*, Folio, Gallimard.
R. Rolland, *Jean-Christophe*, I, II, Le livre de poche.
G. Simenon, *Maigret se trompe*, Presses de la cité.